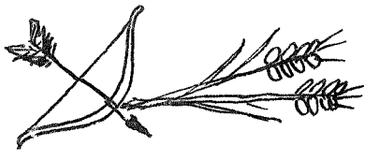
※教会CS新聞「いずみのひろば」はぜひ、教会の人と一緒に読んでください。

いずみのひろば

2025年 9月号
日本基督教団泉教会
NO,559 教会学校



『祝福を奪ったヤコブ』

創世記25章19～24節

イサクとリベカに、ずっと待っていた双子の男の子が生まれました。先に生まれたお兄さんは赤く毛深い子で、エサウと名づけられました。エサウのかかとをつまんで生まれてきた弟はヤコブと名づけられました。兄弟はすくすくと成長しました。兄のエサウは外を駆け回るのが好きで、野原で狩りをする人になりました。弟のヤコブは静かな人で、家の手伝いをして暮らしていました。

やがて、お父さんのイサクは、すっかり年をとり、目もほとんど見えなくなってきました。そこで、兄のエサウを呼んで言いました。「私はもういつ死ぬかわからないから、お前に神さまの祝福を与えたい。その前に鹿を捕ってきて、おいしい料理を食べさせておくれ。」エサウは張り切って狩りに出かけました。部屋の外で、この話を聞いていたお母さんのリベカが、ヤコブに言いました。「お父さんがエサウに祝福を与えようとしています。」ヤコブは神さまの祝福を受け継ぐのは自分だと思っていました。リベカも可愛がっているヤコブに受け継がせたいと思っていました。そこでリベカは、ヤコブにエサウの服を着させて、腕と首に子ヤギの毛皮を巻きました。 こうして、ヤコブは毛深いエサウに変装して、お父さんに料理を持って行きました。目がよく見えないお父さんは、ヤコブが着ているエサウの服の匂いをかぎ、腕に巻かれた毛皮を触って「声はヤコブのようだが、確かにエサウだ。」と思い込み、料理を食べると、ヤコブに神さまの祝福を与えるお祈りをしたのです。その後に勇んで狩りから戻り、料理を持ってきたエサウは、弟のヤコブが、神さまの祝福を自分からだまし取ったことを知り、とても嘆き、激しく怒りました。

何年か前にも、ヤコブは、狩りから帰ったエサウに「豆のスープをやる代わりに、家を継ぐ兄の権利を僕にくれないか。」と言いました。エサウは、とてもお腹が空いていたので、大切な兄の権利を、豆のスープとあっさり交換してしまったことがありました。エサウはそのことも思い出し、二度も自分を出し抜いて大切なものを奪ったイサクを殺してやりたいと思いました。

それに気づいたお母さんのリベカは、ヤコブに親戚のおじさんのところ行くように言いました。「しばらくして、兄さんの怒りがおさまったら帰っておいで。」と、遠いところに、ヤコブを逃がします。

でも、兄のエサウと仲直りできるのは20年も先になってしまいます。お父さんやお母さんとも二度と会えませんでした。長い間、ヤコブは辛く寂しい日々を過ごします。自分の利益のために、人に嘘をつき、騙したりしたので、仕方ないことかもしれません。でも、神さまは、そんな心の弱いヤコブのことを決して見放しませんでした。この後もずっとそばについて、守ってくださいます。

お話　辻野公美子先生